

司書課程の教育について：図書館実習を終えて

吉田 沙也加（異文化コミュニケーション学部
異文化コミュニケーション学科）

私は2014年度立教大学を卒業し、機械系のメーカーに就職します。司書をはじめ図書館に関わる仕事に就くという選択はしませんでした。立教大学における4年間の学生生活の中で図書館学から受けた影響・刺激は計り知れませんが、図書館を取り巻く環境に対して真剣に考え、学習に取り組んだ経験はこれからの生活の中でも大いに生きていくものであると確信しています。その中で、特に図書館実習を終えて、生まれた疑問を受けとめ、今後の可能性やありかたについて意見を求めてくださった中村先生に感謝いたします。

今や図書館で働くことは資格がなくとも可能である、という実態は多くの地域でみられつつあると思います。図書館実習においても、図書館で提供されるサービスの簡略化やシステム化が追求されている印象を受けました。時代・社会が変わる中で図書館がどう変化するべきか、それに応じた図書館学の学びはどのようにあるべきか。本稿では「専門性を持った人物『育成』」をキーワードとして後者に焦点を当てました。この専門性とは、図書館学の中で完結するものだけではありません。考える力、社会に対する視野・視点。そうした高度な思考技術も司書に求められる能力であると考えています。こうした考えを前提として、以下に図書館実習と、それに先立って学んだ講義の内容に関する考えを述べます。

私が考える図書館実習と履修講義の理想的な関係性は、図書館実習を二段階に分け、まずは基礎的な知識を習得し、図書館の現場を経験した後、更に発展的な講義を受け、最終的な成果を図書館側と共有するという構図です。二段階に分けた理由ですが、おそらく司書資格を取得しようと申し込んだ人のうち、真剣に司書になろうと考えて始めた人はそう多くないと考えます。したがって、より多くの人に図書館学に触れてもらうことを考えても資格取得に対する門戸を狭める必要はないと思いますが、その出口は狭め、〇〇大学で司書資格を取ったということ、ひいては資格を保有することそのものに対し今以上の付加価値をつけていくべきではないでしょうか。またその司書資格取得において、「現場を知る」ために図書館実習が果たす役割は非常に大きいと認識しています。知識だけではなくそれが現場でどのように使われているのかを確かめる機会は確実に必要であり、実習を通してそれまでの講義の中でインターネットなどの文献の情報に頼りいかに机上の空論のような発言をしてきたかを実感しました。図書館実習は法的には必修科目ではなく、実習を経験しない学生が立教では増えているという話を伺いましたが、どんな形にせよ図書館で働くということがいかなるものか、その内側から図書館を見つめることができる機会は司書課程の中にあるべきです。個人的な経験ではありますが、私は4年次に実習に参加しましたが、可能な限り3年次には実習を終え残りの1年間は密度の濃い事後学習に充てることが理想です。現場を知り、図書館学の知識と現実が結びついたことでさらに自発的な学習につながると考えますし、ここから先の課程（4年次）は原則そうした意識を持ちより発展的な図書館学の学び合いを希望する者のみに限ってもよいのではないかと考えます。

図書館実習につづいて、講義の内容にも触れたいと思います。実習前に履修必須とされていた科目らは、確かに基礎知識として持つておくべきではありましたが、そのほとんどが実習の中のほんの一部でしかなかったという現実には正直驚きと共に焦りを感じました。「もっとやるべきことはたくさんある」、そう直感しました。私の場合3年間をかけた司書課程の学びのほぼ全て凝縮された実習期間は毎日圧倒され続け、それまでの図書館学で私が持って

いた視点とは異なるレベルでの取り組みが必要であることに気付かされました。個人の経験に基づく考えではありますが、一部でしかなかったと感じた講義は縮小し、それまでの知識を実習先図書館の現状と照らし合わせる時間に充てるなど事前／事後学習・分析に割く時間がもう少しあっても良いのではないかと考えます。例えば分類の講義では一つの答えはなく、個人によって様々な分類の仕方があることを学びました。どの分類が一番適切であるかは、その本が置かれた場所や利用者によって異なりますし、そうした前提を自ら決め、自らの根拠に基づいて判断することの面白さを毎回感じていました。それを、実習先の図書館ではどのように分類されているのか、どのような分類の価値観を持って利用者にアプローチしているのか、自らも同じような分類をするのかなどさらに図書館実習とつなげる機会があればより大きな学びを得られると考えます。個人的な取り組みではなく、指導して下さる先生や他の履修者たちと意見交換することができる分類の講義で行うことでこそさらに自身の視野や価値観を広げる可能性も期待できます。

また、講義科目間におけるつながりを実感する機会が少ないことも気になりました。図書館実習とそれに先立って履修が求められる講義科目との間も然りです。図書館実習が履修した科目群を総合的にみつめる場であることは良いものの、その前後さらに総合的、俯瞰的な目を持って取り組む講義があってもよいのではないかと考えます。おそらく図書館実習事後指導で実習者同士が話し合った場はそのような環境になっていたと思われそうですが、たった半日だけではとてももったいなく思います。より長い時間をかけてそれまでの講義内容を振り返り、実習で得た気づきを発展させていく時間は図書館実習の意義をさらに高めるためにも不可欠であると考えます。例えば実習先図書館を実例にとった事後学習の後、最終的な各個人の考えを図書館と共有するなどが考えられ、そうした履修者との交流で生まれる新しい刺激に図書館側もある程度の期待を持って臨んでいただけるような雰囲気築いていけたらと思います。正味2週間という期間だけのつながりはあまりにも短すぎますし、司書課程を通して一つのバディ制度のような図書館との関係構築も新しい刺激に成り得ると思います。図書館学を教える立場の方や図書館側からの期待やある程度のプレッシャーが将来の図書館界を担うような人材育成に良い効果をもたらすことを期待します。

最後になりますが、司書を育てるという視点に立って、大学と図書館が相互に連携し人材を育成していく姿勢が求められていると考えます。実のところ、これまでお会いした図書館関係者の方たちの中にも、図書館で働くことを強くは勧めないとおっしゃる方もいました。心の中で小さくうなずいてしまった一方、これでは新しい図書館は生まれないと残念にも思いました。今現在司書に求められている図書館学、ではなく未来の図書館・司書に求められている資質は一体どういったものであるのかを常に問い続け変化しなければならないと感じています。立教大学の司書課程も、そうした価値をこれからも維持し図書館界をリードしていくような人材を生み出すためにまた変化し続けることが求められているのではないのでしょうか。